

令和 8 年度

学校推薦型選抜試験問題

保健福祉学部 小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子（7頁）には、解答用紙（3枚）及び下書き用紙（2枚）が挟み込んであります。試験開始の合図があったら、直ちに中を確認、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出なさい。
- 3 問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出して、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙の所定欄に記入しなさい。
- 5 句読点は、1字と数えなさい。
- 6 試験室で配付された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰りなさい。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

課題文を読み、後の問いに答えなさい。

【課題文】

一般に、やる気は、特定の行動を引き起こす原動力として理解されている。とりわけ、「やる気があれば頑張れる」というように、われわれはやる気を努力と結びつけて理解している。やる気は努力を促して行動を引き起こすと考えているわけだ。

ちなみに、自分の経験をもとに信じているこのような理解の仕方を、心理学では素朴理論と呼ぶ。われわれは、この「やる気＝原動力」という素朴理論に基づいて自分や他者の行為を解釈しているのである。

何よりもわれわれの体験が、この素朴理論を裏づけている。やる気や努力は実感しやすい。心身にエネルギーが満ちあふれ、目の前の課題に意識を集中するといった心理状態は誰しも体験したことがあるだろう。逆に、しなければならない課題に集中しようとしても気が散ってしまったり、先延ばししてしまったり、あれこれと自分に言い訳をして、もっと楽しい別の活動に逃避してしまったりといった体験もあろう。このように、やる気の有無は「やる気体験」、さらには「努力体験」としてイメージしやすいため、それが「やる気＝原動力」と信じる根拠となっているわけだ。

素朴理論はこのように体験的な裏づけがあるために強固なのだが、素朴すぎるという欠点がある。たとえば、やる気がありさえすれば常に行為が生じるだろう。よく耳にする「やる気はあるんだけど、なかなかできない」というセリフが示す通り、やる気が必ず行動に結びつくとは限らない。

また、やる気という言葉に「気」という漢字が含まれているという点も興味深い。そもそも「気」とは、空気や大気のような「変化、流動する自然現象」を指し、そこから転じて「生命、精神、心の動き」「心のはたらき、意識」をも意味するという。「気が変わる」、「移り気」といった言葉からわかるように、そこには一時的で不安定というニュアンスがある。「俄然<sup>がぜん</sup>、やる気が出てきた」「一気<sup>う</sup>にやる気が失せた」といった表現からもわかるように、やる気には波のような一時的で不安定な性質があるのだ。

やる気に似た言葉として「意欲」がある。やる気と同様、自分の心理状態（「今日は意欲的だった」）や他者の様子（「あいつにはまったく意欲が感じられない」）に対して用いられる日常語である。

意欲という言葉はそもそも「意志」の意と「欲求」の欲の複合語だという。意志とは最後までやり遂げようとする心理を指し、欲求とは「〇〇したい」という個人の内部から湧き出る願望を意味することから、意欲とは「やりたい」という強い願望を原動力として、最後までやり抜こうとする心理現象を意味する。

ポイントは「意」と「欲」のいずれかが欠けると意欲とは呼べないという点だろう。「〇〇したい」と思っているだけで意志が弱かったり、「成し遂げよう」という意志はあっても「やりたい」という強い気持ちがなければ、意欲的とはいえないのである。

たとえば、食通と呼ばれる人たちは、食べることにに対して意欲的に違いない（「食べることにに対してやる気がある」とはいわないはずだ）。「おいしいものを食べたい」という欲求は誰にでもある。しかし、それを成し遂げようとする意志はあるだろうか。空腹時に「ラーメンが食べたい」と思っても、近場にラーメン屋がなければ、「パスタでもいいか」というように、他のメニューで妥協する人は多いに違いない。ラーメンを食べようとする「やる気」がすぐに失せてしまうわけだ。

それに対して、食に意欲的な人は、あくまでもラーメンに固執し、遠くに移動してまでもラーメンを食べることにこだわりつづけるだろう。さらには同じラーメンであっても、よりおいしいものを追い求め、たとえば、近隣にある複数のラーメン屋の評判を調べ上げて比較検討するに違いない。その結果、彼ら自身が食べるに値すると考えるラーメンに確実にたどり着く。彼らは単に「おいしいものを食べたい」という欲求が強いだけでなく、おいしいものを食べ遂げるという意志が強い人たちなのである。

しかも、彼らの意欲はその場限りではなく、いつでもどこでも発揮される。一日三度の日常的な食事場面のみならず、出張や旅行の出先でも、彼らの食に対する意欲的な姿を観察できるはずだ。

以上のように考えると、やる気と意欲の微妙な違いがわかってくる。やる気が短期的で不安定な状態を指すのに対し、意欲には意志のはたらき加わるため、

「粘り強い」(持続性)、「確実に行為が起こる」(確実性)、「いつでも発揮される」(安定性)といった意味が含まれるのである。

「やる気とは何か」「意欲とは何か」という原理的な問いよりも、むしろ世の関心を集めているのは「やる気」であれ、「意欲」であれ、それらの「高め方」というトピックであろう。

世間のニーズに<sup>こた</sup>えるかのように次々と刊行される書物には、「目標を設定せよ」「ご褒美を効果的に使え」「ポジティブに考えろ」といった言葉が躍る。しかし、それらによって問題がすっきり解決されたという声を聞くことはほとんどない。いくつかの「<sup>しよぼうせん</sup>処方箋」によって解決するほど、単純な心理現象ではないからである。

「やる気(意欲)の高め方」に関して、われわれの素朴理論がある。その典型例が「ほめればやる気になる」といった「ほめ言葉」の効用だろう。確かに他者からほめられればうれしいし、そのことによってもっと頑張ろうと思うといった経験は多くの人にあるだろう。しかし、この考え方もあまりにも素朴すぎる。「ほめ言葉」が人のやる気に及ぼすはたらきは意外に複雑で微妙なものであることを、心理学は明らかにしているのである。

たとえば、「なぜこの人は私をほめるのだろうか」と、その背後に何か隠された意図があるのではと勘ぐってしまうことがある。上司が、教師が、親がほめる場合、「もしかすると、私に〇〇をやらせたいのでは？」といった、ほめる側の思惑を感じてしまうのだ。もちろん、いつもそのように懐疑的になるわけではないが、むしろ「相手の言いなりになるものか」といった反発を招く可能性さえある。単に、ほめればよいというわけではないのだ。

出典：鹿毛 雅治『モチベーションの心理学—「やる気」と「意欲」のメカニズム—3版』、  
中公新書、2023年(一部改変)

【問1】 「やる気＝原動力」という素朴理論について、筆者が下線部のように述べているのはなぜか、25字以内で述べなさい。

【問2】 筆者は、「やる気」と「意欲」をどのように説明しているか、違いが分かるように120字以内で述べなさい。

【問3】 あなたの学習場面での「意欲」の高め方について、課題文を参考に400字以内で述べなさい。

